

白羽の矢が当たってラッキー？

放送現場から問い合わせがあった。「白羽の矢が立つ」を「大役に選ばれた」というプラスの意味で使ってよいか。

私自身はこの使い方はどうもなじまない。人身御供^{ひとみこくう}のイメージが強烈なのだ。子どものころに見た昔話のアニメで、川の氾濫を防ぐために、女の子を川の土手に埋めて水害を鎮めるという衝撃的な話が脳裏に焼きついている。神によって屋根に白羽の矢を立てられた家では、泣く泣く娘をいけにえとして差し出す。こんな時代に生まれなくて本当によかった、と子ども心に思ったものだ。

ただ、現在ではこの民間伝承・俗説を知人も少なく、「白羽の矢が立つ」は多くの中から選出されるという中立的な使い方、さらに名誉なことに選ばれた幸運を表す場合にも使われている。

今年のプロ野球を盛り上げているBIG BOSSこと日本ハムの新庄剛志監督。昨年秋の電撃就任の際、メディアやネットでは一斉に「新庄監督に白羽の矢が立った」、または経営側を主体に「白羽の矢を立てた」と報じた。もちろん「人身御供」ではなく、「大抜てき」であることは間違いない。

国語辞典をみると、多くが「犠牲」「抜

てき」両方の使い方を載せている。

『三省堂国語辞典』では、2014年発行の7版で「本来は、犠牲となる者にいう」（下線は筆者）という注釈がついていたが、2022年8版では「名誉ある場合にも、犠牲になる場合にも使う。」と変わっている。

「こだわる」「鳥肌が立つ」「あわや」「ジンスクス」のように、もとはマイナスの意味で使われていたものが、プラスの意味で使われるようになるのは決して珍しい現象ではない。

また、別の番組からも相談があった。「番組で“白羽の矢が当たった”という表現を使ったら、視聴者から疑問の声が寄せられた。“当たった”は完全に間違いなのか」。

これについては、文化庁が2018年に調査をしている。「白羽の矢が立つ」を使うという人が76%、「～当たる」を使う人が15%。本来の「立つ」が多いものの、「当たる」もゼロではない。もとの話を知らなければ、「矢＝当たる」という連想も無理はない。また、「当たる」だと一層プラスの意味合いが強くなりそうだ。

いずれにしても「白羽の矢～」を使うときには、それが的を射た表現であるか、注意が必要だろう。 東 美奈子(ひがし みなこ)